

バウムテストにおける樹型の分類¹⁾

中 島 ナ オ ミ *

Classification of Types of Tree-Drawings in “Der Baumtest”

Naomi Nakashima

要旨：幼児から老人、健常児・者から様々な発達障害や精神障害の臨床事例について約 7,600 枚のバウム画を収集したので、幼児を対象にしたこれまでの分類基準を改定し、多種多様なバウム画に対応できる分類表を作成した。樹冠の輪郭の有無を重視した分類法であり、「冠型」・「人型」・「主幹型」・「放散型」・「側枝型」・「その他の樹型」・「幹と付属」・「幹」・「融合」・「不定型」・「木以外」・「錯画」・「白紙」の 13 分類である。さらに、「不定型」と「白紙」以外には幹先端処理などによる下位分類を設けた。

Abstract : Based on our collection of a total of approximately 7,600 tree drawings on “Der Baumtest” from various individuals from infants to the elderly and from healthy children and adults to clinical cases of various developmental and mental disorders, we created a classification table applicable to different types of tree drawings by revising existing classification criteria for infants. The classification method focuses on the outline of the crown, and includes the following 13 types : “crown”, “humanoid”, “trunk”, “radial”, “side branch”, “other” types, “trunk with a crown/branch by implication” type, “trunk with no crown/branch” type, “fusion” type in which the independence of tree as an image is vague, “uncertain” type in which an intention to draw a tree can be somewhat perceived despite a lack of a definite shape, “non-tree” type in which a concrete shape other than a tree has been drawn, “scribble” type in which the drawing is unclear, and “blank” type in which nothing is drawn. In addition, subclassifications based on factors such as apical termination were established for types other than “uncertain” and “blank” types.

Key words : バウムテスト Der Baumtest (Koch’s tree-drawing test) 樹型 types of tree-drawings
樹冠の輪郭 outline of crown 幹先端処理 apical termination

I はじめに

スイスのコッホ (Koch, K.) によって体系化されたバウムテスト (Der Baumtest) は、木を課題とする投射描画法であり、描かれた樹木画 (以下、バウム画²⁾とする) の形態、筆圧や運

筆、用紙上での位置などの多種多様な特徴を読み取って解釈される。中でも、形態的特徴は多数の指標として採り上げられ、解釈の際には重要な着眼点となる。しかしながら、多数の指標を使ってバウム画を検討しても全体像をうまく現すことはできない。指標による部分的な検討

*関西福祉科学大学社会福祉学部 准教授

法の限界を指摘した藤岡・吉川 (1971) は、「イメージ表現としてのバウムは、全体としての一種のパターン認識を、われわれに強制するからだ」とその理由を述べ、「すべてのバウムを一貫した態度で眺められるような、大ざっぱな視点」として幹先端処理のあり方に着目した「バウム全姿」の類型化を提唱した。

指標による細かな特徴把握の重要性を理解しつつも、バウム画の第一印象から得られるものとの違いに違和感を抱いていた筆者は、藤岡らの提唱に共感し、部分的な検討で失われたものを全体像の検討によって蘇らせることができると考えた。

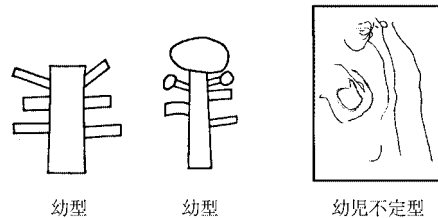
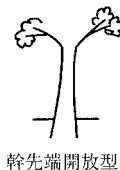
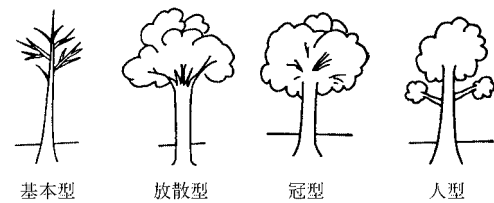
以来、筆者はバウム画全体像の類型化という課題に取り組んできたが、幹先端処理とは別の視点に着目した類型化である。当初は、幼児のバウム画のみを対象にした樹型³⁾分類 (中島・塚口、1982 a) であったがその後も検討 (中島ら、1982 a・1982 b; 中島、1983・1984 a・1984 b・1992・2004) を重ねてきた。

今回、幼児から成人、さらに発達障害や精神障害の臨床事例にも適用できる樹型の分類表を作成したので、基準の変遷の過程と新たに作成した分類基準について報告する。

Ⅱ 樹型分類の視点

1. 藤岡・吉川 (1971) の視点

まず、藤岡らの分類を紹介する。幹の先端の描き方で困惑を示す被検者が多く、さらにその表現型の種類の多さから幹先端処理に着目して、以下のような分類が行われた。「基本型・放散型・冠型・人型」の標準的な 4 樹型と分類困難な種々の「特殊なバウム」の中から「幹先端開放型」を挙げ、さらに 5、6 歳の時期に出現する「幼型」とその前段階の「幼児不定型」の計 7 分類 (図 1) である。基本型は、「幹先端が 1 本のまま細くなって閉じた」ものであり、「バウム成長後の年齢集団ではつねにその頻度が最も高い」ことに因んで命名された。放散型は、「幹の先端をそのまま枝分かれさせる



藤岡ら (1971) の図 (P. 11) を一部改変

図 1 藤岡らの樹型分類

型」であり、「冠型」は、「幹の先端処理を放棄して、樹冠の輪郭を描くことで、全姿の輪郭を閉じ… (中略) …概して枝組みの構成にはあまり関心がない」ものを指す。そして、「放散型や基本型と同型の幹先端を表現しながら、なお上部の冠の輪郭によって囲んでいるものがある。類型分類としては、幹先端の類型の方を優先させることにする」と説明されていることから、樹冠の輪郭の有無よりも幹先端処理を優先する分類法であると理解できる。さらに、「人型」は、「(生長とともに) 上へ昇ってしまうべき下枝が、少数だけ冠の下へ残ってしまったとみなすことのできる型」とし、「幹先端開放型」については、「幹先端処理による輪郭閉鎖を完全に放棄したのか、あるいはまったく無関心とも受け取れる、先端開放型」と説明されている。「幼型」については、幹先端が直線で閉じられた模式図と、幹の上に樹冠の輪郭が載りそして下枝もある模式図が提示されている。なお、「幼型」についてはその後吉川 (1978) に

よって下位分類が行われたが、やはり幹先端処理に着目した分類であった。

2. 中島の視点

植物事典（1989）では、樹冠は「個々の樹木の枝葉が空間を立体的に占有している部分」と定義されている。以後、自然の木の樹冠を樹冠部、樹冠部がバウム画として描かれたものを樹冠とし、両者を使い分けることにする。

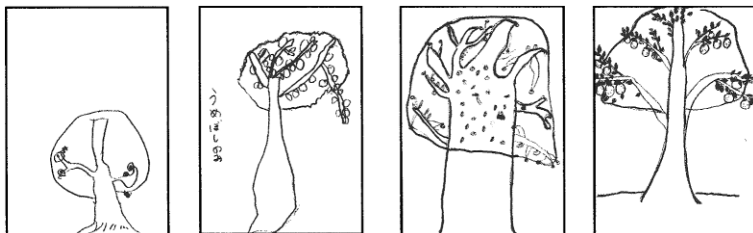
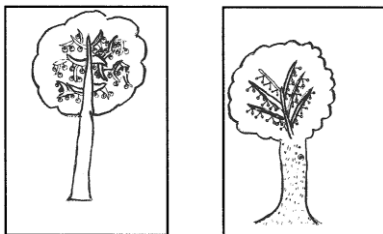
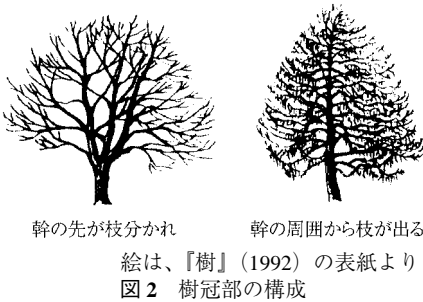
自然の木の形は、枝が幹からどのように派生しているかによって大きく二通りに分類できる（図2）。幹の先が枝分かれして樹冠部を構成するものと、幹の周囲から枝が派生し、幹が木の

先端まで達しているものがある。そして双方とも、枝は次々と枝分かれして複雑な枝組みを構成し、葉は生い茂ってむら葉⁴⁾（簇葉）となる。このように複雑な形態を示す樹冠部の輪郭の描き方に対照的な二つの様式があることに筆者は気づいた。描画の順序を観察していると、輪郭を先に描いてから内部を描くタイプ（図3）と、幹と枝あるいは枝だけで樹冠を表現した後に輪郭を描くタイプ（図4）がある。この場合、長く伸びた枝を横切らないように輪郭を描いたり、あるいは輪郭の形が歪になっても全ての枝を囲い込むように描いたり、あるいは枝を横切った状態で輪郭が描かれることがある。

また、たとえ乱雑に塗りつぶされた樹冠であっても先に輪郭が描かれている場合もある（図5）。

以上のような輪郭の描出過程を観察したことから、輪郭を描く行為には「幹先端処理の放棄」以上の何らかの意図が含まれていると筆者は考えた。

さらに、樹冠が表現され始める頃の初期のバウム画にも、対照的な二つの表現様式が観察された。一つは幹の上部に小さな樹冠の輪郭を付ける（図6a）、あるいは幹の上部を塗りつぶす（図6b、c）、あるいは幹の周囲を輪郭で囲む（図6d）というもので、二つ目は幹に多数の短い線⁵⁾（図7a）や枝様の線を付けたり（図7b）、あるいは枝様の突起が一筆描きで描かれているもの（図7c）である。複雑な枝組みとむら葉から成る樹冠部が、前者ではまとまりとして表現され、後者では、樹冠部の主たる構成要



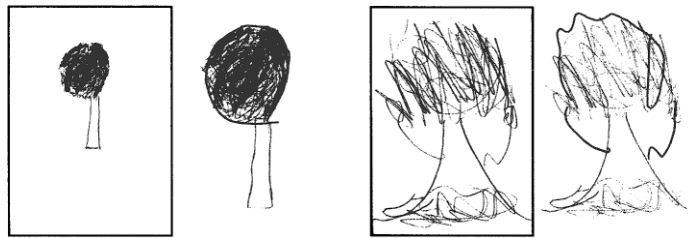


図 5 乱雑な印象を与えるが先に輪郭が描かれた事例

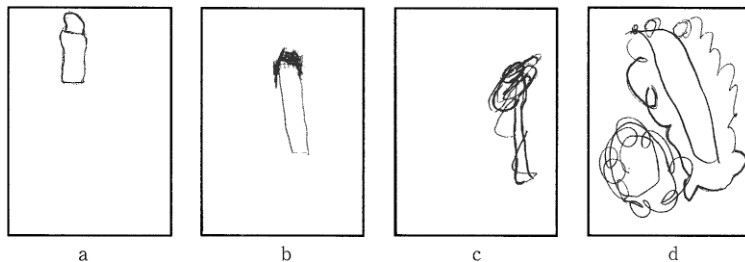


図 6 初期のパウム画における樹冠の表現様式 (まとまり)

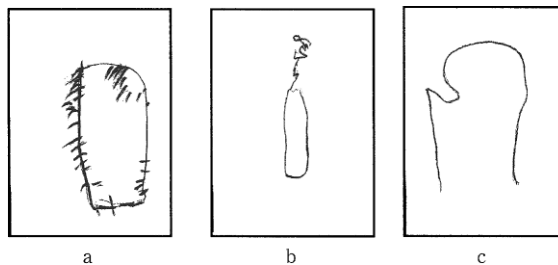


図 7 初期のパウム画における樹冠の表現様式 (枝)

素である枝によって表現されている。つまり、前者は部分よりも全体を、後者は全体よりも部分を主とする被検者の認知パターンの表れだと理解した。それ故、樹型分類の視点を幹の先端処理のあり方ではなく、樹冠の表現様式、つまり輪郭の有無に置くことにした。

Ⅲ 樹型分類の変遷

1. 最初の樹型分類 (1982 a)

最初に樹型分類を試みた対象は、幼児のパウム画であった。当時、子どもの心理臨床の職に就いていた筆者は早期発見と予防の重要性を痛感し、幼稚園・保育所を対象にした精神保健

(当時は精神衛生) を研究課題に選んだ。次いで、非言語的で所要時間が短いという検査特性を活かしてパウムテストをスクリーニングの手段として使うことに決め、個々のパウムテストの解釈のみならず集団としての特徴を検討する方法を模索していた。集団特徴の検討法として、一谷ら (1968) の研究に代表される指標⁶⁾による検討を先ず行なったが、前述したように、指標による検討と全体像の第一印象との違いに違和感を感じたことから、樹型による検討も行うことにしたのである。

最初の樹型分類では、3 歳児～5 歳児クラスの幼児 194 名が描いた 194 枚のパウム画を対象

に以下の10種に分類した。①幼児基本型…輪郭のある幹に枝⁷⁾があるもの。②幼児冠型…輪郭のある幹と樹冠があるもの。③幼児放散型…幹の先端が枝分かれているもの。④幼児人型…樹冠とその下に枝があるもの。⑤幹のみ…輪郭のある幹で、(a) 全く幹だけのもの、(b) 幹に付属程度の枝や実がついているもの。⑥きのこ型…幹と樹冠の境界があいまいなもの。⑦一線幹…一線の幹よりなるもの。⑧幹描線不定…幹の輪郭が不明瞭なもの。⑨その他…木の一部を描いたもの。⑩錯画…バウム形成が困難なもの。

分類の対象が幼児のバウム画であったため樹型の名称に幼児を冠し、上まで伸びた幹と幹の両側から出た枝で表現された樹型の名称については、とりあえず藤岡に倣って「幼児基本型」としたが、これには輪郭のあるものは含まれていない。また、⑥・⑦・⑧の3型については、出現頻度は低いが臨床的な問題が示唆される場合が多いので独立項目とした。

この分類法から、暦年齢が大きくなるにつれ「幼児基本型」と「幼児冠型」の2樹型の占める割合が増え、6歳の男児では「幼児基本型」が、女児では「幼児冠型」が多いことが分かった。

2. 中島ら(1982b)の分類

最初の分類法を発表した直後ではあったが、先の⑤の下位分類である(a)と(b)を独立した項目とし、年少の幼児に多い「錯画」から藤岡・吉川(1971)のいう「幼児不定型」に相当するものと、実や葉などの木の一部だけを描いたものを項目として独立させた。但し、「幼児不定型」は臨床事例では幼児に限らず出現するので幼児を省き「不定型」とした。その結果、分類項目が増えたため、先の⑥・⑦・⑧の3型を下位分類項目として扱うことにし、以下の9種に分類した。①幼児基本型…幹と枝があるもの。②幼児冠型…幹と樹冠があるもの。樹冠の小さいものも含む。③幼児放散型…幹の先端が

枝分かれているもの。T型⁸⁾やY幹を含む。

④幼児人型…幹と樹冠とさらにその下に枝があるもの。小さなごまかしの樹冠も含む。⑤幹と付属…主に幹が描かれ、それに付属程度の枝や実やあるいは何かがついているもの。⑥幹のみ…全く幹だけのもの。⑦不定型…錯画ではないがバウムの形成が明らかでないもの。⑧錯画…バウムの形成が全く困難なもの。教示の了解ができずに他の絵を描いたものも含む。⑨その他…木の一部を描いたもの。

学年別・性別に分類結果を検討し、①～④の主要4樹型の占める割合は、5歳児クラスになると90.0%になり、学年が進むにつれて男児では「幼児基本型」が、女児では「幼児冠型」が増え、しかも「幼児冠型」への集中化は男児よりも著しいという結果を得た。このことから、中尾・吉川(1974・1975)や岩城・吉川(1979)が指摘する「青年期女性において冠型が高頻度で出現」という傾向が幼児期にも存在することを明らかにした。さらに、4樹型の特性を幹先端や根元に関する指標から検討した。

3. 中島(1983)の分類

「一線幹」と「幹描線不定」をスクリーニングの観点から再び独立した分類項目として扱い、幹描線不定を「不定幹」と改称し11分類とした。次いで、樹冠としての条件を揃えるために、「幼児基本型」の特徴に加えて幹先端に小さなごまかしの樹冠がついたタイプ(図8の事例12)を「幼児人型」から「幼児基本型」に変更し、「幼児人型」の基準から「小さなごまかしの樹冠も含む」を削除した。

また、対象数が922枚と増えたので3歳から6歳までの6ヶ月ごとの暦年齢区分で検討することにした。

「幼児冠型」と「幼児基本型」の出現率の比は、6歳後半の女児では20:1となり、男児では年齢と共に「幼児基本型」が増加し6歳後半になって「幼児冠型」より多くなるが、その比

は 0.9 : 1 であった。

4. 中島 (1984 a・1984 b) の分類

上まで伸びた幹とそして幹の両側から枝が出たものを「幼児基本型」と命名してきたが、藤岡・吉川 (1971) の「基本型」とは分類基準が異なり、しかも分布の基本を占めていないので、中島 (1984 a) から「幼児幹枝型」と改称した。

ところで、分類の対象数が多くなるにつれ判定困難なバウム画が増えてきた。これまで「幹の先端と幹の両側の双方から枝が出ているタイプ」は、優位に描かれている枝の部位によって「幼児幹枝型」か「幼児放散型」のどちらかに分類していた。しかし、発達と共に本来は消失するはずの下枝を残した未熟な「幼児放散型」とみなすのか、あるいは幹先端の枝がいつか消失して側枝が発展する、つまり「幼児幹枝型」への移行型とみなすかについての結論を得るには、同一事例における樹型の変遷や幼児期以降の樹型分布の検討が必要となる。そこで、分類の基準を保つために、幹と樹冠が描かれていても主要 4 樹型に該当し難いタイプのために「特殊型」を設けた。

この基準に従って、年長の幼児 (暦年齢が 72 ~ 83 ヶ月) 221 名の樹型分布を調べたところ、「幼児冠型」と「幼児幹枝型」の男女の分布パターンに有意差が認められ、カルフ (Kalf, D. M.) の「木の幹は男性性を、樹冠は女性性を具現化している」(山中 1971) を支持する結果が得られた。

中島 (1984 b) では、基準の変更はないが各樹型の下位分類の視点にもなり得る指標とその模式図を列挙した。

ところで、当時の筆者はバウムテストを学ぶために『バウム・テストー樹木画による人格診断法一』(1970) を熟読していた。しかし、その内容に疑問⁹⁾を抱いたので 1984 年にはコッホのドイツ語の原著 (Koch, 1976) の発達に関する章を榎本居氏の協力を得て訳し、コッホの

指標選定の視点や樹型に対する考えの一端に触れることができた (中島, 1985)。コッホは、初等学校や中等学校で実施された多数のバウム画を解釈理論の構築のための資料としているが、これらのバウム画は通常の教示¹⁰⁾で得られたものではない。2 枚法で実施され 1 枚目に対しては、「果樹を一本描きなさい。用紙の全面を使ってよろしい」、2 枚目に対しては「最初の木とは違う木を一本描きなさい。もし枝のないクーゲルクロネを描いたのなら、必ずアストクロネのある木を描きなさい」である。クーゲルクロネとは樹冠部が輪郭で、アストクロネとは枝組みで表現されたものを指すことから、コッホも樹冠部の表現様式に着目してバウム画を大きく 2 種類に分けていることが分かった。原著には系統的に樹型を分類するという視点は特にないが¹¹⁾、教示に使われている言葉は樹型を表す用語として理解できる。

5. 中島 (1992) の分類

1983 年からは、小学校を対象にした学校精神保健に取り組むことになり就学時健診から卒業までの期間をバウムテストで追跡できる機会を得た。新たに児童期のバウム画が分類対象に加わったこと、そして将来的には幼児から成人のあらゆるバウム画に対応できる分類基準とするために名称から幼児を外した。そして、幹が上に伸びて木の先端まで描かれているという特徴を強調するために「幹枝型」を「主幹型」に改称した。

児童期になると、「幹の先端と幹の両側の双方に枝があるタイプ」が増えたので、このタイプを「側枝型」と命名し「特殊型」から独立させた。また、項目数を減らすために「一線幹」と「不定幹」を独立した項目として扱うことを再び止めた。

6. 中島 (2004) の分類

幼稚園・保育所・小学校での精神保健活動で得たバウム画が約 4,800 枚、臨床検査として実

施したバウム画が約 1,400 枚、他に専門学校生や老人などのバウム画を含めると、収集したバウム画の総数は約 7,600 枚にもなった。そこで、幼児から老人、さらに発達障害や精神障害のバウム画にも対応できる分類基準の作成を試みることにした。

対象数の増加、特に臨床事例の増加に伴って幹と樹冠は描かれてはいるが「冠型・主幹型・放散型・人型・側枝型」の 5 樹型に分類し難いタイプが増加したのでそれらを「その他の樹型」にとりあえず一括し、「特殊型」を廃止した。

次いで、中島ら（1982 b）以来の「錯画」と「その他」を、「木以外」・「錯画」・「白紙」の 3 分類とした。「木以外」は木を描くように教示されているにもかかわらず、顔や人物・文字・木の一部などのような木以外のものが具体的に描かれている場合、「白紙」は文字通り何も描かれていない場合を指し、残りを「錯画」とした。その結果、項目数は 5 樹型と「その他の樹型」・「幹と付属」・「幹のみ」・「不定型」・「木以外」・「錯画」・「白紙」の計 12 分類となった。

Ⅳ 樹型の分類表

今回、主に以下の 3 点について検討し、分類基準を充実させた。まず、幹と樹冠が描かれているが 5 樹型に該当しないタイプに適用する「その他の樹型」の充実を図ること。二つ目は、「幹と付属」から「幹に直接、実や葉などが付いたもの」を除き、これを幹の部分だけが描かれた従来の「幹のみ」と併せて新たに「幹」とし、従来の「幹のみ」を廃止する。三つ目は、木としてのイメージの独立性が曖昧なタイプとして、新たに「融合」を設けたことである。

13 分類から成る樹型の分類表を表 1 に示す。描画による木のイメージの表現段階を、幹と樹冠が描かれているもの（これをバウム形成とする）、幹は描かれているが明確な樹冠がないもの、木としてのイメージが曖昧なもの、錯

画に近いが木を描こうとする意図が何となく感じられるもの、木としてのイメージが全くないもの（これをバウム不能とする）の 5 段階に分けて樹型を設定した。「不定型」以外の樹型には下位分類を設けたが、分類の視点に応じて様々な下位分類が可能となるのでここで示した下位分類例、特に 5 樹型に関してはその一部である。図 8 に各分類に対応する事例¹²⁾を示す。

「冠型」の下位分類例としては、冠内枝が樹冠の輪郭からはみ出した「冠内枝のはみ出し」、冠下枝¹³⁾の枝先が樹冠内に入りこむ「冠人型」、樹冠下部の輪郭が左右の側枝で代用されている「半冠型」（代用部分の長さは輪郭全長のほぼ 1/3 以下）、実や葉を線状に並べて描き輪郭の代用とする「輪郭の代用」がある。他に、幹や枝の先端が樹冠の茂みの中に隠れるように表現され、下から見上げたような「下から見た冠」、幹の根元付近まで樹冠で覆われた「根元までの冠」がある。

「人型」は、後述する「冠型」としての輪郭の条件を満たす樹冠に下枝（冠下枝）があるものに限定し、ヒト型に近い形状を示す「冠下枝が一对」や冠下枝が左右のどちらかにしかない「冠下枝が片側のみ」などを人型の下位分類とする。ところで、痕跡のような冠下枝が描かれている場合は、「冠下枝の痕跡」として「冠型」に含める。

「主幹型」の下位分類としては、幹先端が用紙からはみ出した「幹上縁出」、幹の先端に直接実や葉が付いた「幹先端に実や葉」、あるいは小さなごまかし冠が付いた「幹先端にごまかし冠」、幹の先端の高さが側枝の先端の高さより低い「幹先端が枝より低い」、位置左右どちらかの側枝がない「片側の枝」などがある。

「放散型」には、枝が幹から連続して 3 本以上に分岐した「枝分かれ」、幹先が二股に分岐した「Y 幹」、幹先端から枝が放射状に出た「放射状の枝」、閉じた幹先端から一線枝や二線枝がでた「閉じた幹先端から枝」などがある。

「側枝型」は幹の先端と幹の両側（あるいは

表 1 樹型の分類表

分類基準			樹型	下位分類例	事例					
幹と樹冠がある（バウム形成）	輪郭がある	下枝なし	冠型	冠内枝のはみ出し	1					
				冠人型	2					
				半冠型	3					
				輪郭の代用	4					
				下から見た冠	5					
				根元までの冠	6					
				冠下枝の痕跡	7					
	下枝あり		人型	冠下枝が一对	8					
				冠下枝が片側のみ	9					
	輪郭がない	幹が先端まで伸びる	主幹型	幹上縁出	10					
				幹先端に実や葉	11					
				幹先端にごまかし冠	12					
				幹先端が枝より低い	13					
				片側の枝	14					
		幹の先端から枝が出る	側枝なし	放散型	枝分かれ	15				
					Y 幹（Y 字型幹）	16				
					放射状の枝	17				
					閉じた幹先端に枝	18				
					閉じた幹の両端から枝	19				
			側枝あり	側枝型	幹先端が枝分かれ（Y 幹含む）	20				
					閉じた幹先端に枝（両端から枝含む）	21				
					5 樹型以外		その他の樹型			
					幹だけで樹冠がない	幹の上に枝が 1 本		幹と付属	幹の上に枝 1 本	22
						幹に付属程度の枝が付く			幹と付属	図 7 a
	一筆描きの突起		図 7 c							
幹に小さなごまかし冠が付く		図 6 a								
樹冠としての独立性が乏しい		図 6 d								
幹に直接実・葉や何かが付く		幹	幹に実・葉・何か	23						
幹のみ			幹のみ	24						
			枝なし幹のみ	25						
木としてのイメージの独立性が曖昧			融合	人と融合	図 9					
				その他の融合	26					
形は定まらないが木を描こうとする意図が何となく感じられる			不定型		27					
バウム不能	木以外のものが具体的に描かれている	木以外	顔・人物	28						
			草花・野菜	29						
			文字	30						
			木の一部（実・葉・花・枝など）	31						
			幾何図形	32						
			その他の絵	33						
	何かが描かれているが具体的でない		錯画	錯画	34					
	点や短い線			極小						
全く何も描かれていない		白紙								

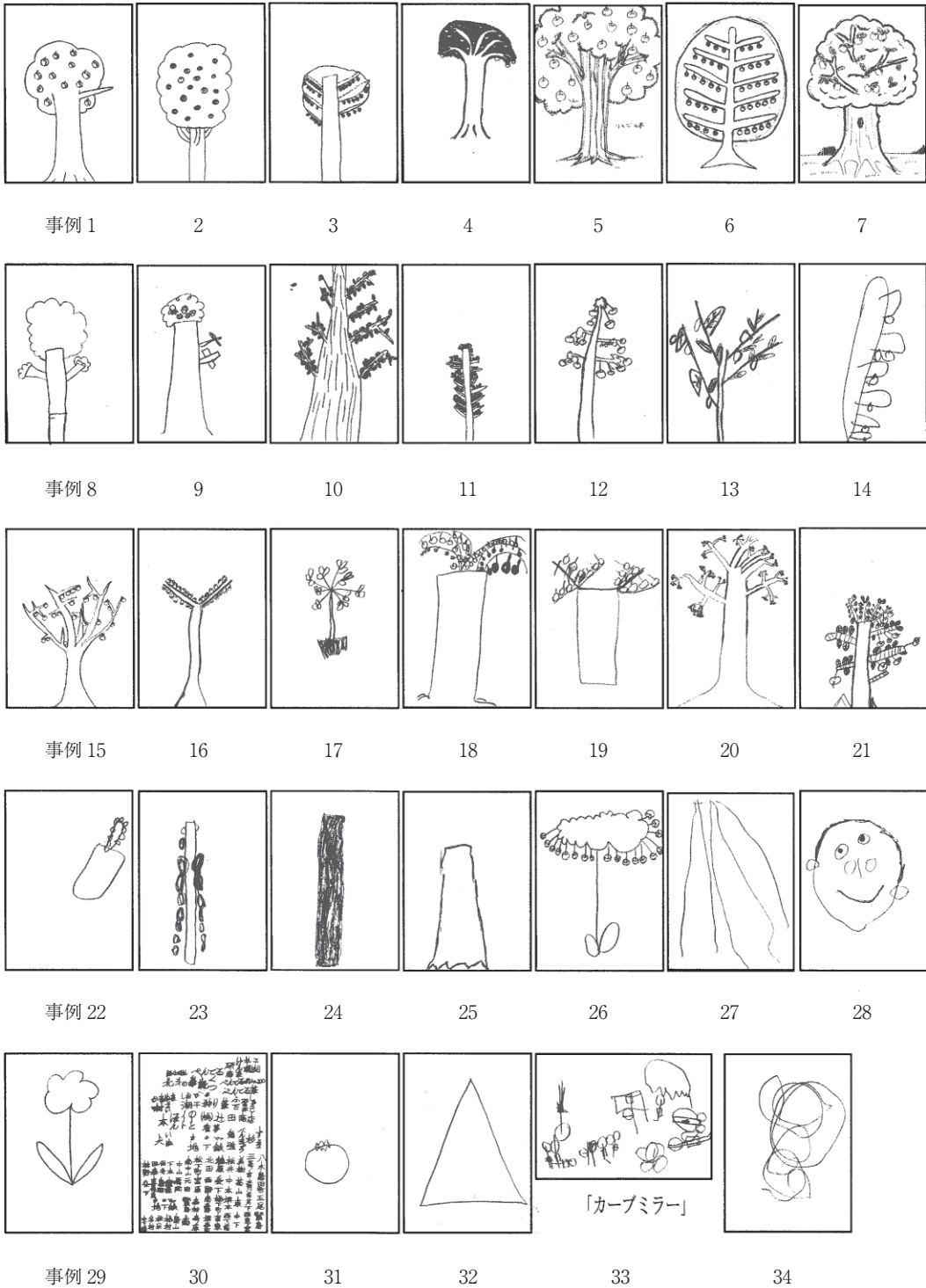


図 8 樹型分類表の事例

片側) から枝が出たタイプをいい、下位分類は、「放射状の枝」を除いた「放散型」の下位分類と同様である。

以上の 5 樹型の分類基準を満たし難いタイプを「その他の樹型」(表 2) とし、これについては後述する。

「幹と付属」は、幹は描かれていても明確な樹冠部が描かれていないタイプを指す。

「幹」は樹冠や枝のないもので、幹に直接、実や葉などが付いたものがある。下位分類の「幹のみ」は、樹冠が描けない段階の初期のバウム画に多く見られ、初期の人物画において顔だけが描かれる場合に相当する。人物のイメージ全体が顔で表現されているのと同様に、木のイメージ全体が幹で表現されているのであって、幹の部分だけが選択的に、描かれたのではない。「枝なし幹のみ」は、「幹のみ」と同様に枝や樹冠のない幹だけのバウム画だが、根が描かれているにもかかわらず枝や樹冠のない幹だけのものや、根元に広がりがあるにもかかわらず枝や樹冠がないものを指す。

新しく設けた「融合」は、木としてのイメージの独立性が曖昧なタイプで、出現頻度は低いが萌芽期のバウム画の資料として貴重なので独

立した樹型として扱うことにした。「融合」のほとんどは「人と融合」である。これは「木以外」に分類される顔や人物とは異なり、「人間(顔)風の木」という印象を与えるバウム画であり、「人と融合」の判定においてのみ同時に実施した人物画を参考にした。図 9 に「人と融合」の事例を人物画とともに示す。「その他の融合」には、「草花風の木」や実や葉を樹冠に見立てた木などがある。

「不定型」は、形は定まらないが木を描こうとする意図が何となく感じられるものを指し、「木以外」は、木以外の何かが具体的に描かれている場合であり、描かれた内容に応じて下位分類を設けた。

「錯画」は、何かが描かれてはいるが具体的にでないものを指す。用紙一面に描かれたなぐり描きから点や線が僅かに描かれたものまであるので、描画の範囲が非常に狭い「極小」とその残りの「錯画」に分けた。

次に、「その他の樹型」について述べる。「その他の樹型」は先にも述べたように、幹と樹冠が備わってはいるが 5 樹型、実質的には「冠型」・「主幹型」・「放散型」の 3 樹型の基準に合わないタイプであり、下位分類例と事例を表 2

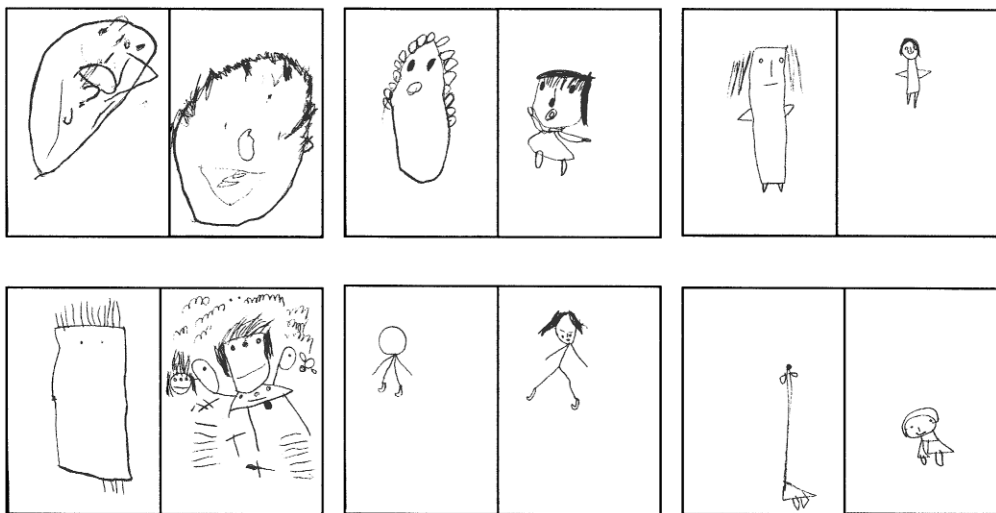


図 9 「人と融合」の事例

表 2 「その他の樹型」の下位分類例

樹型	分類基準	下位分類例	事例
その他の樹型	葉で樹冠を構成	むら葉冠	1
	実で樹冠を構成	むら実冠	2
	写実的な樹冠	複雑冠	3
	塗りつぶしの樹冠	塗りつぶし冠	4
	らせんによる塗りつぶし樹冠	らせん冠	5
	輪郭の長さが 1/3 以下	短い輪郭	6
	枝の様な輪郭	枝状冠	7
	クリスマスツリー型	クリスマスツリー型	8
	同じような大きさの輪郭がいくつもある	分散冠	9
	幹の下端までの樹冠	地面までの冠	10
	幹の先が漏斗状に広がる	漏斗幹	11
	不自然に幹先を付け足す	不自然な幹の追加	12
	幹先を曲げて枝（主枝）にする	幹先が枝	13
	枝（側枝）のような大きな葉	枝状の葉	14
	T 字型幹	T 字型幹	15
	Y 幹の分岐部から枝がでる	Y 幹の間から枝	16
	幹描線の上端から枝がでる （側枝ありを含む）	幹線の上端から枝	図 11
		幹線の間からも枝	17
	幹と枝の描線が未分化	メビウスの木	18
	幹と冠の描線が未分化	ピルツ（きのこ型）	19
	樹種に特有の表現	ヤシ型（枝状の葉）	20
		ヤシ型（枝状冠）	21
		ぶどう棚型	22
	幹を土台	幹を土台にした木	23
	株立ち	株立ちの木	24
	木の縦半分のみ	半分の木	25
	統合不全	統合不全の木	26
	未完成・中断	未完成	27
	その他	その他	

と図 10 に示す。

先ず、輪郭で樹冠部を表現するという「冠型」の基本条件に合わないタイプとして、「むら葉冠」・「むら実冠¹⁴⁾」がある。強迫的に描かれた葉や実のまとまりによって生じた主観的輪

郭を輪郭線とみなして「冠型」に含めていたが、今回からは実際の輪郭線がないので「冠型」から除外した。同様に、小学校高学年頃から出現する樹冠部が写實的に詳細に描かれた「複雑冠」、樹冠が塗りつぶしのみで表現された

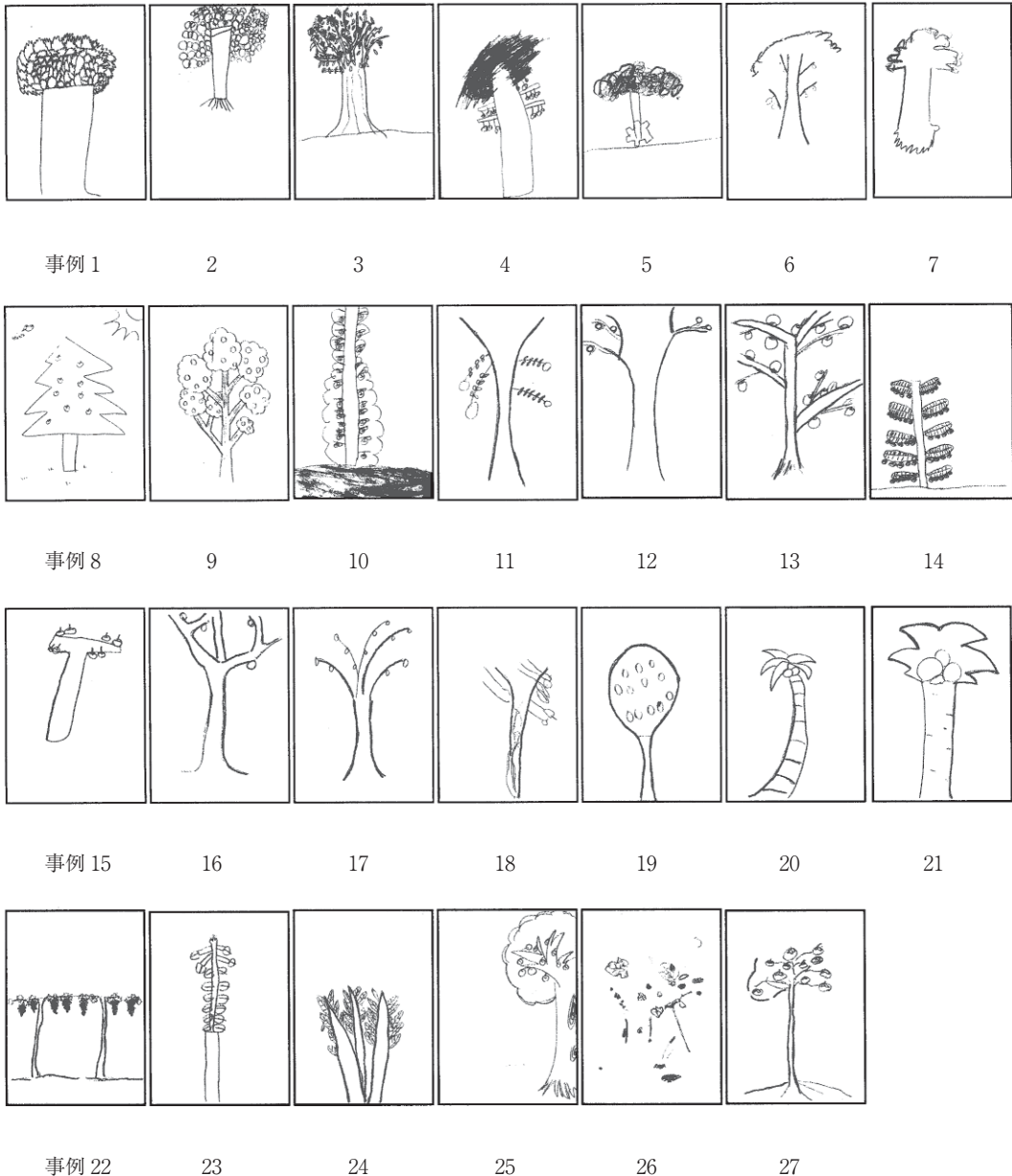


図 10 「その他の樹型」の事例

もの（「塗りつぶし冠」・「らせん冠」）も「冠型」から除外した。他に、輪郭の長さが1/3以下の「短い輪郭」、枝状の突出が連続して描かれている「枝状冠」や「クリスマスツリー型」や小さな輪郭がいくつも描かれた「分散冠」、輪郭が地面あるいは用紙の下端にまで達しているために木の全てが樹冠になった「地面までの冠」などがある。但し、樹冠が用紙からはみ出したために輪郭の一部が欠けたものや、実や葉を線状に並べて輪郭の代用として描かれているものは従来通り冠型とする。

次いで、幹が木の先端まで伸び、そして幹の先端が細くなって閉じるという「主幹型」の特徴を損ねる以下のタイプを「主幹型」から除外した。幹の先が漏斗状に広がった「漏斗幹」、不自然に幹先端を付け足した「不自然な幹の追加」、幹の先端が単に曲がっているのではなく、幹の先端を強引に曲げて枝のように扱った「幹先が枝」、大きな葉が側枝のように描かれている「枝状の葉」などがある。

これまで「Y 幹」の亜型とみなしてきた「T 字型幹」や「Y 幹」の分岐部から上方向に枝が出た「Y 幹の間から枝」は、「その他の樹型」とした。幹先が分岐するという「放散型」の特徴を特に損ねるタイプとして、図 11 に示すような幹の描線の上端から枝が出た「幹線の上端から枝」がある。幹線の上端のみならず左右の幹線の間にも枝がある「幹線の間からも枝」も同様に、幹先端に生じた空間は、時には枝によって間接的に閉じられることもあるが、直接、閉じられることがないのが特徴であ

る。なお、幹線の上端から幹先端が閉じられている場合は、「放散型」の下位分類である「閉じた幹の両端から枝」に、側枝があれば「側枝型」のそれに含める。

ところで、「幹線の上端から枝」と類似のタイプとして先に紹介した藤岡・吉川（1971）の「幹先端開放型（図 1）」がある。「幹先端処理による輪郭閉鎖を完全に放棄したのか、あるいはまったく無関心とも受け取れる」のでこのように命名したと説明されているが、では何故、無関心になったのであろうか。筆者は、幹の描線の先端から枝を出すことに被検者の関心が注がれたために幹先端処理が疎かになったと推測する。何故なら、幹線の先端に継ぎ足すという形で描かれる枝は、一線枝だけではなく二線枝の場合もあり、さらに高次な分枝が描かれることがあっても、幹線の間にもできた空間は直接閉じられることはないからである。

他に、幹の描線と枝の描線との分化がなく、つまりで両者の描線が連続し、幹の描線がいつの間にか枝になるという「メビウスの木」（山中、1976）、同様に幹の描線と樹冠の輪郭との分化が不良な「ピルツ（きのこ型）¹⁵⁾」も、「その他の樹型」とする。

幹の先端から葉が枝のように出た「ヤシ型（枝状の葉）」と、枝状冠のように葉が描かれている「ヤシ型（枝状冠）」は、今回からは樹種に特有な表現型として扱い、「ぶどう棚型」と共に「その他の樹型」の下位分類とする。

「幹を土台にした木」とは、単に幹が継ぎ足された状態ではなく、まさに幹を土台にしてそ

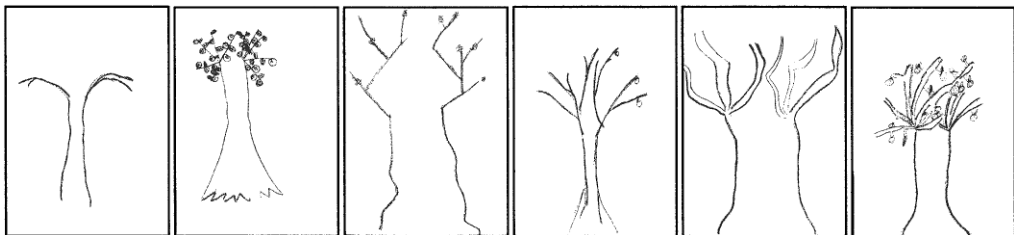


図 11 「幹線の上端から枝」の事例

の上に木が描かれているタイプをいい、「株立ちの木」とは、それぞれ独立した複数の木が描かれているのではなく、株立ち状態に描かれたものである。「半分の木」は、木の左右のどちらか一方しか描かれていないもので、「統合不全の木」は、木の部分が描かれてはいるが木の全体像として統合されていないものを指す。

「未完成」とは、描画に時間制限がないにもかかわらず自ら描画を中止し、未完成な印象を与えるものである。

他にも 5 樹型に分類し難いタイプは存在するが、ここでは「その他」に一括する。

以上が、今回改定した樹型の分類基準である。

V 今後の課題

今後は、今回作成した分類表に従って、健常児・若や臨床事例集団における樹種の分布を調べる予定である。さらに幹先端や根元やその他の種々の指標を使って、各樹型の特性を検討する予定であり、それによって樹型とパーソナリティとの関連についての知見が得られるであろう。

バウムテストを解釈するには、先ずバウム画をじっくりと観察するがその際の樹型と指標の関係は補完的であり、樹型を判断するには指標を、そして指標の意味は樹型との関連で考えなければならない場合も多い。その意味でも、樹型というバウム画全体像の特徴を把握すること、そして全体像の出現の多様さを知ることが解釈力を向上させるために必要と言えよう。

注

- 1) 本研究の一部は、平成 19-20 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))課題番号(19530643)の助成を受けたものである。
- 2) わが国では、バウムテストで得られた木の絵を「バウム」と呼ぶことが多いが、本報ではコッホの原著で使われている *baumzeichnung* をバウム画と訳して使用する。
- 3) 一般に樹木の形は樹形と表記されるが、バウ

ム画の全体像の類型化という意味合いで樹型と表記する。そして年少の幼児に多い木の形を呈していない描画もバウムテストの教示によって描かれた木の絵なので、樹型として扱う。

- 4) 葉むら(葉叢)とも言う。
- 5) コッホは、このような多数の短い線を「毛のような」と形容している。
- 6) 一谷ら(1968)では、バウム画の部分的な特徴を項目と言う。筆者も当初は項目を使用していたが、その後は指標を使用。
- 7) 後にコッホの原著で、幹の両側から出た枝が側枝(*Seiten aste*)と呼ばれていることを知る。
- 8) T 幹との混乱を避けるため、後に「T 字型幹」とした。図 8 の事例 28 がその一例。
- 9) 疑問の内容については、中島(2006)に詳しく述べた。
- 10) バウムテストの教示については、中島(2002)に詳しく述べた。
- 11) 樹型に関連する表現として、「枝のある木(*Astbaum*)」、「むら葉冠をもつ木(*Laubkronebaum*)」、「混合型(*Mischform*)」、「むら葉部分をなぐり描きでかいた木」などの記述が原著にある。
- 12) 事例の図の作成に際しては、描線が薄い場合は加筆した。
- 13) 一般に、冠型の下枝を冠下枝という。
- 14) 多数の実が群がるように描かれているので、「むら葉」に倣って「むら実」とした。
- 15) 中島ら(1982 a)で紹介した「きのこ型」と同じ。図 10 の事例 19 は、幹と輪郭の双方の描線が連続している点でビルツであるが、幹と樹冠の間に横線が描かれているのでビルツの典型例ではないことを断っておく。

文献

- Fischer-Rizzi, S. (1980): *Blätter von Bäumen* München: Heinrich Hugendubel Verlag. 手塚千史(訳)(1992): 樹-樹木の神話、医療用途、料理レシピ、あむすく。
- 藤岡喜愛・吉川公雄(1971): 人類学的にみたバウムによるイメージの表現、季刊人類学、2(3), 3-28.
- 一谷 彊・林 勝造・津田浩一(1968): 樹木画テストの研究-Koch の Baumtest における発達の検討一、京都教育大学紀要 Ser. A., 33, 46-68.
- 岩城 操・吉川公雄(1979): 現代青年期女性にみられるイメージ形成の特徴-バウムテストによ

- る人間生態学的研究 3ー、京都女子大学自然科学論叢、10・11, 1-87.
- Koch, K. (1976) : *Der Baumtest : Der Baumzeichenversuch als Psychodiagnostisches Hilfsmittel*. Siebente Auflage. Bern · Stuttgart · Wien, Verlag Hans Huber.
- C. コッホ／林 勝造・国吉政一・一谷 彊訳 (1970) : 『バウム・テストー樹木画による人格診断法ー』、日本文化科学社.
- 堀田満他編 (1989) : 世界有用植物事典、平凡社.
- 中尾舜一・吉川公雄 (1974・1975) : バウムテストの人間生態学的研究ー1. 医学部進学過程学生の調査からー、久留米大学論叢、23(2)・24(1), 89-129・41-63.
- 中島ナオミ・塚口 明 (1982 a) : 幼児のバウムテストー幼児バウムの樹型分類についてー、日本心理学会第 46 回大会発表論文集、239.
- 中島ナオミ・塚口 明・松本和雄・家常知子 (1982 b) : 幼児のバウムテストー樹型分類を中心にしてー、大阪府立公衆衛生研究所報精神衛生編、20, 29-41.
- 中島ナオミ (1983) : 幼児のバウムテスト (第 2 報)、大阪府立公衆衛生研究所報精神衛生編、21, 13-23.
- 中島ナオミ (1984 a) : 幼児のバウムテスト、心理測定ジャーナル、20(5), 13-18.
- 中島ナオミ (1984 b) : 幼児のバウムテスト (第 3 報)、大阪府立公衆衛生研究所報精神衛生編、22, 21-32.
- 中島ナオミ (1985) : 幼児のバウムテスト (4)ー3 オクラス前期の描画についてー、日本心理学会第 49 回大会発表論文集、418.
- 中島ナオミ (1985) : Koch の原著 “Der Baumtest” とその英語版との比較対照による検討 (第 1 報)、大阪府立公衆衛生研究所報精神衛生編、23, 27-40.
- 中島ナオミ (1992) : 幼・児童期の描画テストの項目分析的研究ーバウムテストを中心にー、大阪府立公衆衛生研究所第 102 回研究発表会 (1992 年 9 月 29 日) での発表.
- 中島ナオミ (2002) : わが国におけるバウムテストの教示 臨床描画研究、17, 177-189.
- 中島ナオミ (2004) : 幼・児童期のバウム画に関する縦断的研究ー樹冠部の表現様式ー、日本描画テスト・描画療法学会第 14 回大会抄録集、43. および発表スライド
- 中島ナオミ (2006) : 『バウム・テストー樹木画による人格診断法ー』の問題点、臨床描画研究、21, 151-168.
- 山中康裕 (1971) : 第 1 章双生児による基礎的研究 林 勝造・一谷 彊編著『バウムテストの臨床的研究』、日本文化科学社、Pp. 1-26.
- 山中康裕 (1976) : 精神分裂病におけるバウムテスト研究、心理測定ジャーナル、132, 18-23.
- 吉川公雄 (1978) : 第 4 部バウムテスト 『人間生態学ー生物としての認識からの出発ー』、東海大学出版会、Pp. 110-156.